

高齢者のキャリアと 余暇観・労働観に関する研究

○綿 祐二（東京都立大学）

高齢者、キャリア、余暇観、労働観

1. 緒言

高齢者の余暇に対する関心は、年々高まりを見せて、余暇活動も量から質へ移行し、余暇活動の質的向上が話題に上る時代が近づいてきた。余暇開発センターの余暇意識に関する調査（1991）では、「余暇重視型」の者は全体の9.1%、「余暇・仕事共存型」の者が24.0%合わせて33.1%の者が少なからず余暇に対して意識する者おり、年々漸増していると報告している。しかし、「余暇・仕事共存型」は過去3年で増加傾向を示しているが「完全余暇型」の者は前年度（1990）調査よりも減少傾向にあると報告している。

これまでの高齢者の余暇活動に関する研究は、スポーツ・レジャー参加者の活動時点での横断的研究が多かったが、山口（1986）原田（1989）長ヶ原（1990）らが社会化や再社会化理論によって過去のライフステージとの関わり等から時系列的に整理し縦断的に高齢者の余暇活動を捉えた。藤本ら（1991）は、退職を向かえようとしている熟年者を対象に縦断的に活動の実態・意識を調査し、過去の余暇活動の参加パターンを社会化・再社会化モデルにより分類し、将来の活動の予測を考察した。

我が国の場合、労働時間の短縮等により自由裁量時間の増加がすぐには余暇活動時間の増化には結びつかず、高齢者が急激な環境の変化に対応しきれていないのが現状である。過去のライフステージを振り返った時、自由裁量時間を最もコントロールするのは仕事（労働）である。そこで本研究では、高齢者の過去の仕事（労働）、つまりキャリアに焦点をあて、キャリアによってグルーピングを行い、そのグループ間の仕事に対する考え方（労働観）・余暇に対する考え方（余暇観）及び余暇活動頻度の差異を明らかにすることでその要因の予測を試みた。

2. 研究目的

本研究では、高齢者の過去のキャリアの経緯によってグルーピングを行い（Table. 1）グループ間の余暇観・労働観及び余暇活動頻度の差異を明らかにすることを目的とした。尚、本研究では余暇観を余暇に対する考え方（5項目）、労働観を仕事に対する考え方（5項目）で測定した。

3. 研究方法

- 1) 調査対象：広島県福山市老人大学受講生585名を対象とした。本対象者をキャリア経緯によって分類しグルーピングした。
- 2) 調査期日：第1回調査 1991年8月～9月
- 3) 調査方法：質問紙による集団面接法及び郵送法。有効標本数は、585名（男性203 女性367：回収率100%）
- 4) 調査内容：属性、過去の就業形態、退職前後の労働観・余暇観、余暇活動頻度
- 5) 分析方法：単純集計による記述統計、キャリアパターン別のクロス集計、F検定によった。

4. 結果の概要

キャリアに伴う自由裁量時間によって、「定年退職後勤めていない者 (Group1)」「専業主婦 (Group2)」「現在も継続して勤めている (Group3)」の3つに分類した。

Group1は272名、Group2は164名、Group3は54名であった (Table. 1)。それらのグループの余暇観・労働観を比較したところ、Group1、Group2、Group3の順で余暇を重視しており、仕事の有無が余暇活動に影響していることが窺える (Table. 2)。各項目ごとでは、余暇観では「活動的」「計画的」の2項目で、労働観では「成功させる」の1項目でグループ間の差が見られた。

各グループの活動頻度を見てみるとGroup1とGroup2は活動頻度が多い者が約54%とほぼ同じ結果を示し、Group3が62.7%で他のグループよりも活動頻度の多い者の割合が多かった (Table. 3)。Group1の方が余暇重視志向にあるが実際の活動頻度では逆の結果を示した。意識と実際の行動のずれがあることが窺えた。

Table. 1. キャリアの経緯による分類

| グループ | キャリア形態 | 人数 (%) |
|---------|--------------|------------|
| Group 1 | 定年後勤めていない | 272 (46.5) |
| Group 2 | 専業主婦 | 164 (27.0) |
| Group 3 | 現在も継続して勤めている | 54 (9.2) |
| Group 4 | その他・N. A | 95 (16.2) |
| TOTAL | | 585 (100) |

Table. 2. 余暇観・労働観の平均値及びグループ間の差の検定

| | Group 1 | Group 2 | Group 3 | F | p |
|--------------------|--------------|--------------|--------------|-------|-----|
| 仕事と余暇活動とのウエイト (注1) | 3.012(0.958) | 2.893(0.846) | 2.590(0.763) | 4.498 | *** |
| 余暇活動に対する考え方 (注2) | | | | | |
| 活動的でなければならない | 2.822(0.818) | 2.596(0.746) | 2.667(0.653) | 2.698 | * |
| 成功させなければならない | 2.855(0.793) | 2.645(0.776) | 2.725(0.666) | 2.295 | |
| 目的を持って活動しなければならない | 2.636(0.882) | 2.468(0.735) | 2.469(0.819) | 1.731 | |
| 計画的に行わなければならない | 2.685(0.866) | 2.441(0.793) | 2.580(0.758) | 2.881 | ** |
| 責任感を持って行わなければならない | 2.563(0.856) | 2.386(0.764) | 2.583(0.679) | 2.140 | |
| 仕事に対する考え方 (注2) | | | | | |
| 活動的でなければならない | 2.475(0.864) | 2.488(0.890) | 2.294(0.832) | 1.219 | |
| 成功させなければならない | 2.458(0.896) | 2.452(0.873) | 2.173(0.785) | 2.778 | ** |
| 目的を持って活動しなければならない | 2.305(0.841) | 2.203(0.859) | 2.078(0.688) | 1.200 | |
| 計画的に行わなければならない | 2.294(0.824) | 2.206(0.709) | 2.135(0.742) | 0.782 | |
| 責任感を持って行わなければならない | 2.088(0.851) | 2.000(0.791) | 1.804(0.664) | 1.890 | |

(注1) 1…仕事重視 4…余暇重視 * p ≤ .05 ** p ≤ .01 *** p ≤ .005 (SD)

(注2) 1…絶対そうである 2…そうである
3…必ずしも必要はない 4…その必要はない

Table. 3 各Groupと活動頻度との関連 (N=423)

| | Group 1 | Group 2 | Group 3 |
|------|-----------|----------|----------|
| 活動頻度 | | | |
| 多 | 127(54.5) | 75(54.0) | 32(62.7) |
| 少 | 106(45.5) | 64(46.0) | 19(37.3) |

$\chi^2 = 1.3045$ D.F=2

Table. 4-2 Group 2の労働観及び余暇観と活動頻度との関連 (N=126)

| | 仕事重視型 | 余暇・仕事共存型 | 余暇重視型 |
|------|---------|----------|----------|
| 活動頻度 | | | |
| 多 | 1(25.0) | 48(54.0) | 21(61.8) |
| 少 | 3(75.0) | 40(45.5) | 13(38.2) |

$\chi^2 = 2.0797$ D.F=2

Table. 4-1 Group 1の労働観及び余暇観と活動頻度との関連 (N=216)

| | 仕事重視型 | 余暇・仕事共存型 | 余暇重視型 |
|------|---------|----------|----------|
| 活動頻度 | | | |
| 多 | 8(61.5) | 62(51.7) | 48(57.8) |
| 少 | 5(38.5) | 30(48.3) | 35(42.2) |

$\chi^2 = 1.0187$ D.F=2

Table. 4-3 Group 3の労働観及び余暇観と活動頻度との関連 (N=48)

| | 仕事重視型 | 余暇・仕事共存型 | 余暇重視型 |
|------|--------|----------|---------|
| 活動頻度 | | | |
| 多 | 3(100) | 25(62.5) | 4(80.0) |
| 少 | 0(0.0) | 15(37.5) | 1(20.0) |

$\chi^2 = 2.2125$ D.F=2